資料紹介

旧乱歩邸蔵『探偵クラブ』全一〇号

（新潮社、一九三二・四～一九三三・五）合本、切り抜きあり

米山大樹

◇

旧江戸川乱歩邸に残された資料のなかから、『探偵クラブ』全一〇号（新潮社、一九三二・四～一九三三・五）の合本【図1】一冊を紹介する。この合本は、青色の布張り厚表紙で製本され、背表紙には「探偵クラブ　全」と金文字で書かれており、上下に太い二重線の中に細い二重線が入った意匠が施されている。

『探偵クラブ』は、『新作探偵小説全集』全一〇巻（新潮社、一九三二・四～一九三三・四）の付録として発行された雑誌である。山前譲編・ミステリー文学資料館監修『探偵雑誌目次総覧』（日外アソシエーツ、二〇〇九・六）は『探偵クラブ』について、「全集執筆陣による連作小説『殺人迷路』の連載、各作家の横顔や作品論、短編小説、回顧的随筆が主な内容だった。城昌幸、葛山二郎、南沢十七など、全集執筆陣以外も短篇を発表している。第一号の編輯後記によれば、全集完結後は独立した雑誌にしたいとあったが、それは実現しなかった」と紹介した上で、総目次を掲載している。ミステリー文学資料館では、全号のコピー及び第一号、第三号、第七号～一〇号計六冊の現物を揃えているものの、『探偵クラブ』の現存は希少である。

国立国会図書館のリファレンス（『リファレンス共同データベース』管理番号：D1604121205 59、事例作成日：二〇一六・四・二、http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000197146）において、第五号の所蔵機関を探しているという問い合わせに、「お探しの巻号は見当たりませんでした」と回答したという事例が確認できる。

今回発見した合本に書き入れ等は見当たらないが、第六号の二五ページから三〇ページが切り抜かれている【図2】。この箇所は、延原謙「探偵小説の翻訳と海外作家（二）」の最終ページから水谷準「カメレオン」の第一ページにあたり、「江戸川乱歩氏の横顔」として掲載された三編（平井隆「二様の性格」、井上勝喜「江戸川乱歩氏の横顔」、岡戸武平「凝り屋の乱歩氏」）及び甲賀三郎「横溝君の呪ひの塔」を含んでいる。

「江戸川乱歩氏の横顔」は人物評の特集ページである。『探偵クラブ』には、佐佐木俊郎の追悼特集となった最終号を除き、同時配本の全集執筆者についての人物評「氏の横顔」と、次回配本の全集執筆者についての作品評が掲載されていた。第五号の「江戸川乱歩氏の作品」には、浜尾四郎「江戸川乱歩氏に就いて」、大下宇陀児「特異なる美の修業者」の二編が掲載されているが、こちらは合本に残っている。

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料「雑誌・新聞　切抜（昭和六～三五）」には、第五号掲載「江戸川乱歩氏の作品」と第六号掲載「江戸川乱歩氏の横顔」の、切り口の異なる切り抜きが、こよりでまとめられており、「江戸川乱歩氏の作品」の切り抜きの欄外右側には、「コノ外合本セシ分に井上岡戸両君の文アリ」と朱書きされている【図3】。このことから、乱歩は、合本前には「江戸川乱歩氏の作品」のみを切り抜いていたが、その後、今回見つかった合本から「江戸川乱歩氏の横顔」も切り抜き、自己への批評として整理しなおしたものと推測される。『貼雑年譜』第二巻には、これらの批評すべてに「袋」と朱書きされ、「「袋」トアルハ「私ヘノ批評」のハトロン紙ノ袋ニ保存」と説明書きがある【図4】。乱歩が「江戸川乱歩氏の横顔」を切り抜いたのは、合本の制作と『貼雑年譜』の記述との間の出来事ということだろう。

◇

全集の付録雑誌であった『探偵クラブ』の各号の奥付には、一冊一〇銭の定価とともに「新作探偵小説全集の読者に限り無料進呈」と書かれている【図5】。また、『貼雑年譜』第二巻に貼られた『新作探偵小説全集』の広告（『朝日新聞』一九三二・四・一一）【図6】では、「全読者に無料進呈」の「新探偵雑誌」として『探偵クラブ』が紹介されており、「本全集の作者十氏を初め、／斯界総動員の執筆に成る／四六版四〇頁の小型本ながら内容は一粒選り／興味百パーセントの新雑誌!!」と謳われている。『新作探偵小説全集』は、刊行順に、甲賀三郎、森下雨村、大下宇陀児、横溝正史、水谷準、江戸川乱歩、橋本五郎、夢野久作、浜尾四郎、佐佐木俊郎

らの書下ろし長編小説を連ねた全集である。この全一〇巻のうち、第五回配本・第七巻として一九三二年一〇月に刊行された水谷準『獣人の獄』を除く九冊が、乱歩旧蔵資料として立教大学図書館に所蔵されている【図7】。江戸川乱歩『探偵小説四十年（上）』（光文社文庫、二〇〇六・一）によれば、甲賀三郎が新潮社に持ち込んだ企画であり、当時の『文学時代』編集長の佐佐木俊郎の尽力によって実現したものだという。しかし、「書きおろし六百枚というのだから、これは大仕事で、はじめの方の配本の人は一と月か二た月しか余裕がなく、最後の配本の人でも半年しか余裕がなかった。ほかの仕事もしながら書くのだから、多数の作家には無理な注文であった」として、乱歩は、『蠢く触手』が岡戸武平の代作であったことを明かしている。

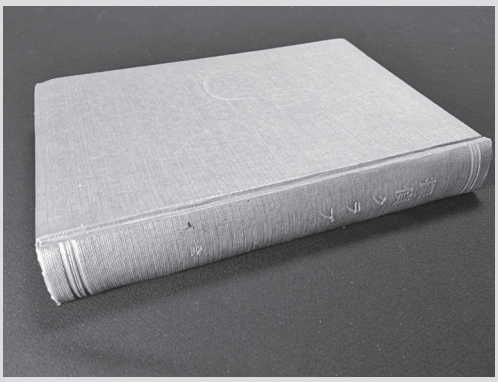
乱歩は一九三二年三月に二度目の休筆宣言をしており、その当時の新聞（『東京新聞』一九三二・三・一八、『大阪朝日新聞』一九三二・三・一八）では社会面で報道されたことを『貼雑年譜』第二巻に記している【図8】。『探偵クラブ』に掲載された乱歩署名の文章は、「巡り来し長篇時代」（第一号）、「大下君の長篇小説」（第二号）、「殺人迷路　第五回」（第五号）、「夢野久作氏の作品に就いて」（第七号）、「映画になつた「姿なき怪盗」」（第七号）、「探偵小説界の為に惜しむ」（第一〇号）の六作、そのうち創作はリレー形式の連作小説「殺人迷路」の担当回のみである。

第六回配本・第一巻として一九三二年一一月に刊行された『蠢く触手』を予告する第五号の「編輯後記」では、「次回配本は江戸川乱歩氏。既にもう原稿は編集部に届けられて居ります。今春、新聞雑誌への寄稿を当分中止する旨声明せる氏の、今年度に於ける唯一の創作です。一ヶ月後をご期待下さい」と乱歩の新作への期待感を煽るとともに、「殺人迷路は例により次回配本の江戸川乱歩氏。しかも、氏がこの連作小説に非常な興味を持たれたことには、自ら進んで、従来の倍以上の枚数をお書き下さつたことです。で、そのため、「探偵小説中の名探偵」と、その他にも、も一つだけ組置にせざるを止むなきに立ち到りました。筆者にお詫びを申し上げます」と、「殺人迷路」執筆への乱歩の意欲を伝えている。『探偵クラブ』からは、休筆中の乱歩の新作を切望する当時の探偵小説関係者の空気を知ることができる。

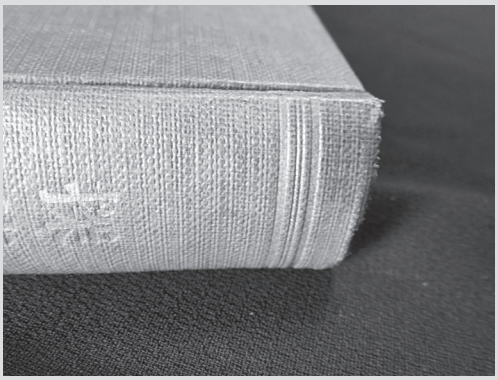
附記

ミステリー文学資料館の所蔵資料については、ミステリー文学資料館・赤川実和子氏にご協力いただいた。厚く御礼申し上げる。

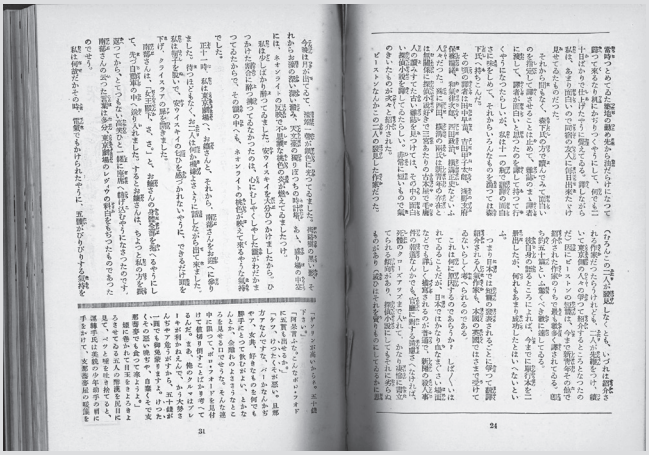
米山　大樹



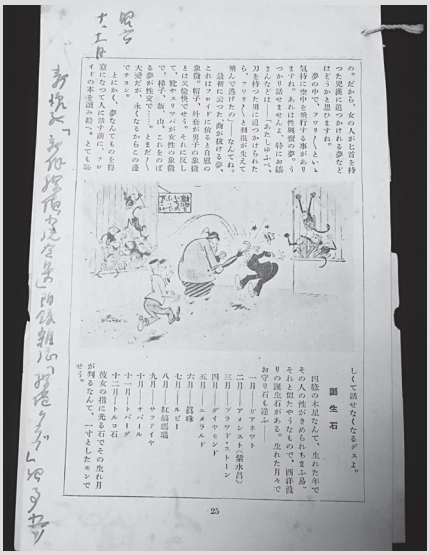
【図1-1】『探偵クラブ』合本（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵）書影



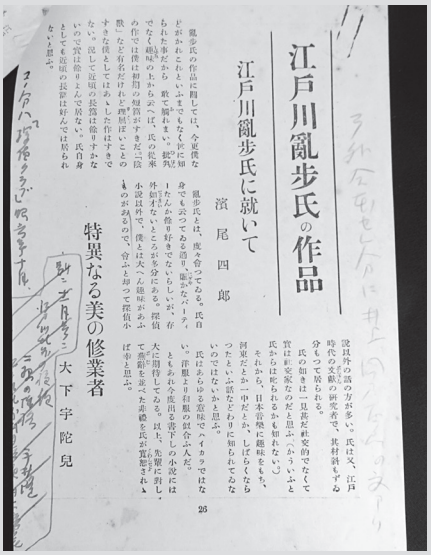
【図1-2】『探偵クラブ』合本（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵）背表紙の意匠



【図２】『探偵クラブ』合本、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵）第六号切り抜き跡



【図3-1】『探偵クラブ』第五号（「雑誌・新聞切抜（昭和六～三五）」立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料）p.25



江戸川亂歩氏の作品

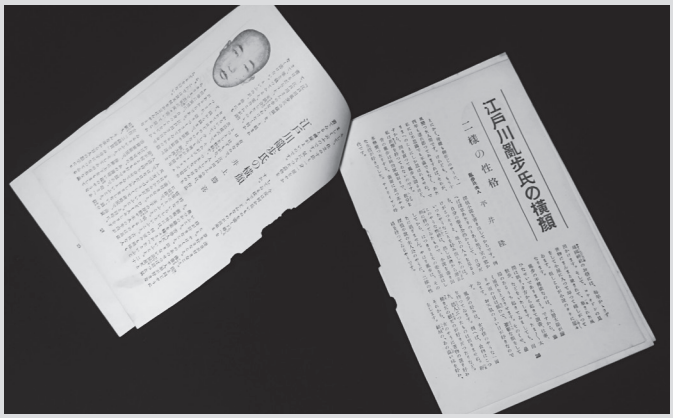
江戸川亂歩氏に就いて

濱尾四郎

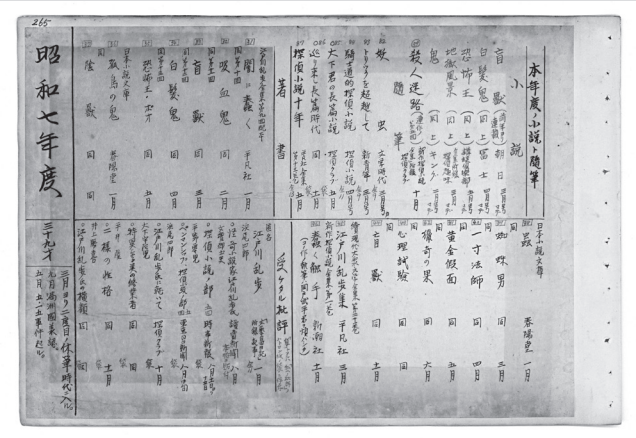
特異なる美の修業者

大下宇陀兒

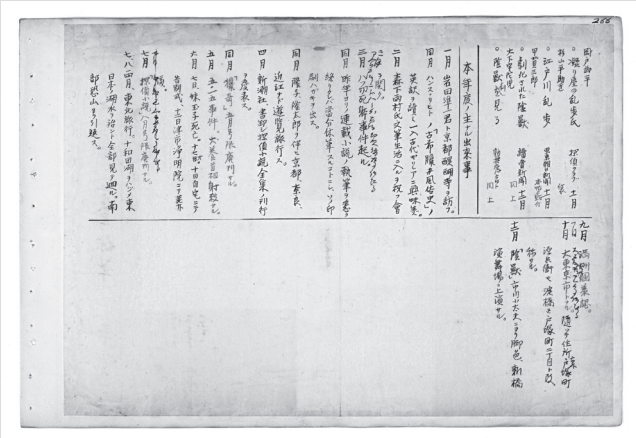
【図3-2】『探偵クラブ』第五号（「雑誌・新聞切抜（昭和六～三五）」立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料）p.26



【図3-3】『探偵クラブ』第六号（「雑誌・新聞 切抜（昭和六～三五）」立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料）p.26-27



【図4-1】『貼雑年譜』第二巻（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料）p.265

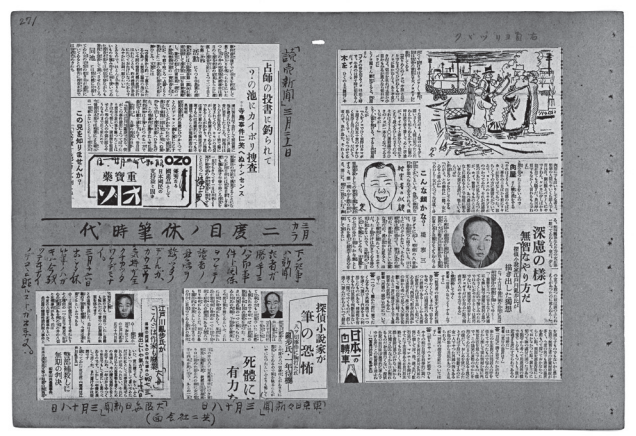


【図4-2】『貼雑年譜』第二巻（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料）p.266

【図５】『探偵クラブ』合本（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵）第六号奥付

【図６】『貼雑年譜』第二巻（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料）p.273

【図７】『新作探偵小説全集』第一～六、八～九巻（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵）書影



【図８】『貼雑年譜』第二巻（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター寄託資料）p.771